

4 外交の島



佐々木 颯人
SASAKI Hayato

長崎県対馬市教育委員会文化財課

常に国際情勢の波に揺れながらも、時代ごとに独自の外交を展開してきた対馬。なぜ対馬は、「外交の島」としての役割を担い続けてきたのであろうか？ 中世から近世にかけて、日本と朝鮮との間で約400年に渡り大きな役割を担ってきた対馬宗氏の外交とは？

外交とは？

外交とは何なのであろうか？

『日本国語大辞典』によると、「外国との交際。国家間の交渉。国家間の関係の処理。」とある。『国史大辞典』では、「狭義では国家と国家との政治的交渉をさす」が、「一般には使節の往来や贈酬・戦争・版図・漂流・帰化移住・貿易・学術宗教の交流などの国際間の諸関係」としている。つまり、外交というのは、国家同士のやり取りに限定されず、一個人を主体とする国際関係も含む言葉である。

本特集の舞台、対馬は日本海と東シナ海の境界に位置し、九州本土よりも朝鮮半島の方が近いことは自明である。その対馬で、鎌倉時代に台頭し、室町時代に幕府から対馬守護に補任され、江戸時代には藩主となったのが宗氏という一族である。

宗氏は、前期倭寇、応永の外寇や文引制度、文禄・慶長の役、日朝国交回復など日朝関係を紡ぐ局面には必須の存在であった。幕末維新期に朝鮮との外交権が明治政府に接収されるまで、約400年もの間、朝鮮通交を一手に担ってきた。

では対馬宗氏の外交手腕とはどのようなものだったのか？ また、対馬宗氏にとって「外交」とは何だったのだろうか？

対馬宗氏と前期倭寇

倭寇とは、対馬・壱岐・松浦地方の人々を中心として、朝鮮半島や中国大陸で食料や人を略奪していた集団である。そのうち、14世紀から15世紀までに活動した倭寇を「前期倭寇」と呼んでいる。朝鮮王朝（李氏朝鮮）は倭寇の禁圧を試みて日本に使者を派遣した。室町幕府



写真2 尾崎地区

や西日本の地域権力（守護大名）と倭寇禁圧を交渉し、見返りに朝鮮王朝との通交が許可された。

朝鮮王朝と交渉し、倭寇禁圧に尽力したことで知られる対馬当主は宗貞茂である。貞茂の治世は、対馬の領国経営の安定に乗り出した時期であり、北部九州の守護大名・少弐氏とともに、筑前一带を支配する「少弐・宗体制」の中心であった。しかし、中国地方の守護大名・大内氏との衝突による少弐・宗体制の弱体化で、貞茂は北部九州を離れ対馬での支配体制を固め始めた。対馬での支配を盤石にすべく、貞茂が領国経営の一環として実施したのが、朝鮮通交であった。倭寇禁圧に尽力し朝鮮との外交関係を築いたことで、見返りに朝鮮からは毎年米を受給していた。

また、貞茂は朝鮮通交に伴い、大陸由来の仏教文物を対馬に将来*させている。宗氏の領国経営上の最重要課題の一つが寺社保護政策である。貞茂は寺の再興や寺領の安堵など仏教信仰をもととして島内支配を固めており、それは子の貞盛にも引き継

がれた。朝鮮通交において、宗氏は梵鐘や経典を朝鮮王朝に求め、島内の寺社に寺宝・社宝として寄進したのである。例えば、上対馬町西泊・西福寺に伝わった元版大般若経は、中国・元王朝から朝鮮を旅して対馬に渡来してきた経典である。経典の奥書には、僧侶・宗益や住持（住職）・慶珣など経典の入手を志した者たちとともに貞茂の名前も見える（写真1）。貞茂は朝鮮へ渡海する彼らの活動をサポートする立場として記名したと考えられる。

1418年に貞茂が没すると、倭寇の活動が再度活発化する。

1419年5月、倭寇は朝鮮半島を襲撃し、中国・明へ向かって北上した。朝鮮王朝側は対策として、倭寇の本拠地の一つである対馬を襲撃する。いわゆる「応永の外寇」である。

応永の外寇と文引制度

1419年6月、朝鮮の大軍が現在の美津島町尾崎を襲撃した。尾崎は倭寇の頭目である早田氏の本

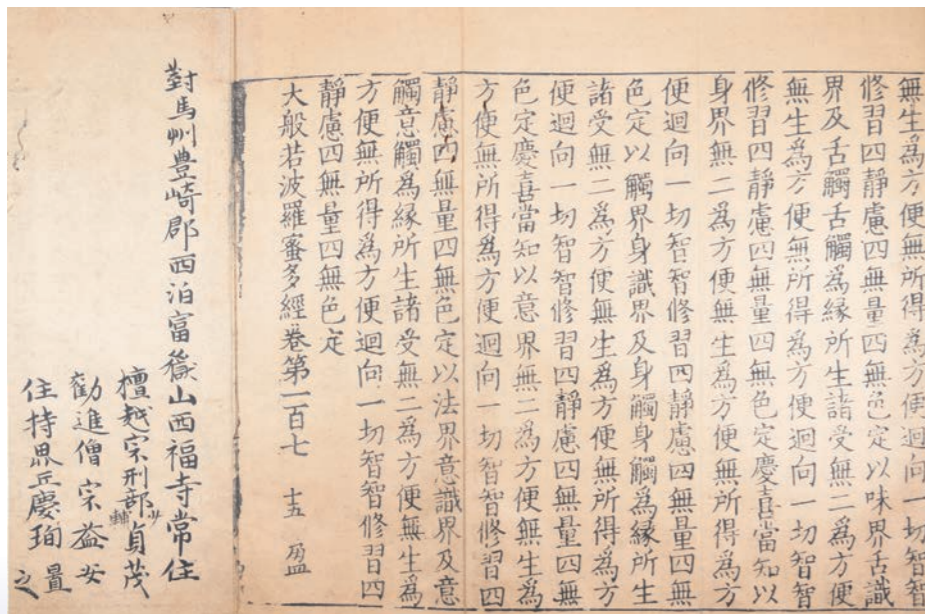


写真1 元版大般若経 奥書（長崎県対馬歴史研究センター寄託）

拠地の一つであり、朝鮮と九州を結ぶ流通拠点の一つであったと考えられている。朝鮮軍は、対馬の船舶を奪取し民家を焼き討ち、捕らえられていた朝鮮人・中国人捕虜を救出する。朝鮮軍は貞盛から修好の手紙が来たため撤退した。これ以後、倭寇の活動は下火となったが、倭寇問題は禍根を残し、対馬と朝鮮との関係は悪化することとなった。

対馬宗氏は、朝鮮通交の再開に努めた。そうした中1426年に貞盛が朝鮮王朝に対し提案した通交制度が「文引制度」であった。「文引」とは現代の

パスポートに相当する。朝鮮へ通交を求める者は「書契」という外交文書を対馬に持参し対馬宗氏が保有する銅製の印鑑「函書」を押印し、朝鮮王朝が倭寇かそれ以外の者かを判断する。文引制度により、日本から朝鮮への通行者は必ず対馬を通り、対馬宗氏は日朝通交において優越的な外交権を握ることとなった。一方の朝鮮王朝も、投降した倭寇に対しては、貿易権を与えるなど懐柔政策の方向性を取り、対馬と朝鮮双方の利害が一致していた。

このように、倭寇禁圧を目的に整備された日朝外交体制において、対馬宗氏は中心的な存在であり、朝鮮通交の高まりとともに対馬宗氏による領国支配も盤石なものとなっていたのである。

こうした対馬宗氏による朝鮮通交の独占は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の直前まで続くこととなった。

対馬宗氏と豊臣秀吉の朝鮮出兵

1586年、対馬宗氏は九州平定のため、福岡に座していた豊臣秀吉から書状を受領する。その内容は、「朝鮮へ派兵するため、忠節を尽くしてほしい」というものであった。対馬宗氏にとって朝鮮通交は領国経営の要であり、朝鮮出兵による朝鮮との関係悪化は領国経営が立ちゆかなくなることを意味する。対馬宗氏は戦争回避を前提として朝鮮との外交交渉に乗り出すこととなる。

対馬宗氏は秀吉の日本統一の祝賀という名目で、



写真3 清水山城 一の丸

朝鮮使節派遣を実現させたが、秀吉はそれを朝鮮の服属と見なし、明までの道案内を要求した。朝鮮側は秀吉の要求を拒絶する。

1592年、秀吉は約16万の兵を朝鮮に派兵させた。釜山への第一軍は肥後宇土小西行長・宗義智であり、朝鮮・明軍への攻撃や朝鮮側との交渉をも担当した。秀吉は朝鮮まで自身が渡海する構想があり、秀吉が各地で滞在する「御座所」と兵糧を格納し前線まで届ける「兵站基地」の建設は、諸大名にとって重要課題であった。厳原町にある「清水山城」と上対馬町にある「撃方山城」はその時に兵站基地として築城されたと言われており、清水山城には3つの曲輪と石垣が現存している。結果、秀吉が朝鮮まで出兵することなく、秀吉の死去をもって朝鮮出兵は日本軍の敗北という形で終焉を迎え、日本軍は撤退したが、対馬と朝鮮の関係は悪化し領内は荒廃したという。

秀吉の後に統一政権を率いた徳川家康は国交を回復すべく、1599年、宗義智に朝鮮との和議交渉を命じた。朝鮮側は国交回復の条件の一つとして、家康から国書を送ることを要求した。家康から国書を送ることは、日本が頭を下げ、和を請うこととなる。義智は、家康からの国書を偽造するという荒技を用いて国交を回復させた。その後、朝鮮から派遣された外交使節が「朝鮮通信使」である。朝鮮通信使は江戸時代に12回日本を訪れるが、1～3回までは「回



写真4 宗義智公画像

答兼刷環使」といって、日本の国書に対する回答と、朝鮮出兵で日本に連れ去られた捕虜の返還（刷環）を目的とした使節であった。

二重の外交

朝鮮との国交を回復させた対馬宗氏は、江戸幕府との幕藩体制下において対馬藩10万石を領知する大名となった。しかし、ほどなくして対馬宗氏のみならず江戸幕府の外交をも揺るがす「お家騒動」が勃発する。「柳川一件」である。柳川一件は、義智の子で2代目藩主・宗義成と家臣・柳川調興との間に発生した事件であり、調興は対馬宗氏の国書改ざん・偽造などを明るみにした。幕府は調興を弘前藩へ、宗義成の外交僧・規伯玄方を南部藩（盛岡藩）へ流罪とする。幕府は玄方の代わりに京都五山の僧を対馬藩の外交文書起草の担当者とし、日朝通交に介入しようとした。

幕府が藩主・宗義成を処罰しなかったのは、対馬宗氏を介した室町期以来の日朝関係を大きく改変することを恐れたためとも言われている。また、最近の研究で、対馬藩は京都五山僧とは別に、外交僧として玄方の弟子を起用していたことが指摘されている。すなわち、江戸時代の朝鮮通交は、江戸幕府と朝鮮王朝との国家同士の外交ではなく、対馬藩と幕府の幕藩体制によって成り立つ「二重の



写真5 歴代対馬藩主の菩提寺「万松院」。写真の階段は「百雁木」という

外交」であった。いわゆる鎖国政策により外交相手国を制限していた江戸幕府にとって、朝鮮との窓口は対馬藩のみに限っており、対馬藩も主に朝鮮通交による利益を独占できていたのであった。

対馬宗氏にとっての「外交」

以上見てきたように、室町期から江戸時代、実に約400年もの間、対馬宗氏は日朝の外交権を一手に担う存在であったと言える。それは、外交交渉や外交制度の整備に長けた対馬宗氏の手腕によるものが大きく、日朝ひいては東アジア世界に適合した外交であったことに他ならない。

また、島の面積の約89%が山林であり、朝鮮や九州との間で外交をしないことには立ちゆかなくなってしまうという緊張感とその根底にはあったことも事実である。

※将来:持ってくること。新しいものをもたらすこと。仏教文物を扱う諸文献ではこの字を用いている。

<参考資料>

- 1) 荒木和憲『対馬宗氏の中世史』(吉川弘文館、2017年)
- 2) 佐伯弘次「大内氏の筑前国支配—義弘期から政弘期まで—」(川添昭二編『九州中世史研究第1輯』文献出版、1978年)
- 3) 横内裕人編『対馬の渡来版経 護り伝える東アジアの至宝』(勉誠出版、2022年)
- 4) 北島万次『秀吉の朝鮮侵略』(山川出版社、2002年)
- 5) 藤井謙治『豊臣秀吉』(ミネルヴァ書房、2026年)
- 6) 鶴田啓『対馬から見た日朝関係』(山川出版社、2006年)
- 7) 顧明源「『柳川一件』後、対馬藩における朝鮮外交体制の再構築」(『史学雑誌』134号、2025年)
- 8) 田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』(創文社、1981年)
- 9) 『長崎県と朝鮮半島』(長崎県教育委員会、1992年)